

令和2年 3月 2日

白老町議会
議長 松田 謙吾 様

白老町議会議員 広地 紀彰 印

派遣成果報告書

| | |
|-----------------|---|
| 日時(期間) | 自 平成30年11月 5日(月) 至 平成30年11月 8日(木) 3泊4日 |
| 目的地 | 大分県竹田市、豊後高田市 |
| 調査事項 | 将来を見据えた観光振興の取り組みについて |
| 視察の成果 (具体的に) | 別紙のとおり報告いたします。 |

※ 必要の都度、写真その他を付加して、研修効果が現れる工夫をする。

1. 大分県竹田市のまちづくり実践

(1) 概要

竹田市は大分県南西部に位置し、周辺を山に囲まれた地である。湧水と自然に恵まれる一方、竹田の子守歌や隠れキリシタンなど深い歴史文化を育んだ地でもある。市内直入町には、「入るラムネ泉」とも称される炭酸泉・炭酸水素塩泉を有する長湯温泉があり、その効能を活用し温泉入浴に対する健康保険適用や「現代版湯治」、クワハウスを切り口とした温泉活用によるまちおこしに個性的な光を感じるまちである。

(2) 竹田市都市再生まちづくり

城下町の風情を武器として生かし観光客や市民に竹田の魅力を五感で感じることを目的に、平成26年竹田市都市再生まちづくり基本計画(10カ年)を策定している。特に、中心市街地はコンパクトシティを進めるマスタープランのもと、居住、公益施設、交通などを中心に生活拠点及び交流拠点づくりを進めている。

(3) 竹田市長首藤勝次氏の講話「温泉療養保険制度」構築までの軌跡

この度、白老町虎杖浜温泉も加盟する全国源泉かけ流し協会の縁もあり、竹田市長首藤勝次氏より、講話を賜ることができた。首藤氏からは旧直入町職員時代の苦労なども交えながら、国民保養温泉地「竹田温泉群」現代版湯治文化の再構築「温泉療養保険制度」の挑戦についてお話を頂いた。

平成元年から、炭酸泉を縁にドイツのバート・クロツィンゲン市との交流が始まった中で、バート市の取り組みで大いに参考になる点があったとのことである。バート市は、温泉療養を核とした健康保養地であり、温泉療養に保険適用を受けるなど、国策として温泉利活用・予防医療活用と観光振興が取り組まれていたとのことであった。

これを受けて、日本で初めて、温泉療養に健康保険を適用するための「温泉療養保険制度」への取り組みが始まったのであった。国の健保制度を見直すという、一自治体からの勇気ある挑戦は、まず地方創生先駆型の事業構築として取り組まれた。

まず、予防医療の取り組みから構築された。具体的には、温泉利用型健康増進エリアの整備、湯中運動プログラムの開発と普及というハードソフト両面からの取り組みと、温泉効能の医科学的な調査蓄積という科学的アプローチから進められた。

また、観光振興の側面からも事業が取り組み、中長期滞在による経済効果、歴史や文化自然を活用した周辺観光との重ね合わせが図られた。こうした予防医療と観光振興の相乗効果としての地方創生先駆型が構築されたのであった。

次に、民間企業との取り組みにより、日本初となる温泉療養保険制度の発信が取り組まれていた。ANAと連携し、温泉療養の旅行ツアー造成が打ち出された。「ヘルスツーリズム」という枠組みでの竹田市の発信と、1日13万人が利用するANA国内外の航空ネットワークが融合しあい、メディアにも大きく取り上げられたとのことであった。

また、予防医療×観光振興として第3に、温泉力の科学的な調査蓄積の取り組みが進んでいた。竹田市と慶應義塾大学の協働により、長湯温泉の温泉を飲湯すると糖尿病の

予防改善効果を有する可能性が示されたとのことであった。この研究成果は国際学術誌にも掲載される論文となっているとのことであった。

4点目として、温泉療養に対する広域連携の取り組みである。北海道豊富町はアトピー性皮膚炎療養から、秋田県仙北市の玉川温泉は悪性腫瘍療法から、そして竹田市は循環器・消化器系疾患療養からのアプローチが有機的に連携しあう「温泉力地域協力協定」を締結するに至る。

こうした「温泉療養保険制度」の政策は、実践内容や経済効果、エビデンス調査など様々なアプローチが実を結び、平成23年度から実行され、日本ヘルスツーリズム振興機構より第8回ヘルスツーリズム対象を受賞するなど高い評価を得ている。

(4) 竹田市中心市街地活性化の取り組み

平成17年に竹田市を中心とした合併により誕生した自治体であるが、地域経済などの衰退が顕著であった。一方で、平成21年度より、農村回帰宣言都市を掲げて以降、転入者やUターン者が増える実態も見られるようになった。こうした動きをとらえ、創業者支援のワンストップ窓口を通じた、様々な支援を行う取り組みを地方創生として取り組んでいる。

また、竹田市都市再生まちづくりの取り組みとして、「城下町の風情が五感に響く『竹田情感まちづくり』」と銘打った観光地向上・回遊性向上・まちなか居住の計画立案実行が取り組まれているなど、随所で首長のリーダーシップが具現化されている状況が見られた。

一方で、竹田市城下町再生プロジェクトでは、有識者、市民代表、関係団体行政はもちろん、市民や高校生からのアンケートを広く募るなど、市民の声に耳を傾ける姿勢も印象的であった。

(5) 所感

2009年に竹田市長に就任した首藤勝次氏のリーダーシップ、まちづくりにかける思いに打たれ続けた感があった。氏は、就任してすぐにTOP運動を提唱している。竹田、オンリーワン、プロジェクトの頭文字をとったこの運動は、竹田でしかできない政策で、全国トップクラスの魅力を持つ自治体に成長しようとする思いから始まっていた。

この運動の実現には、政策・人間・地域力が必要と述べられているが、わがまち白老町に置きかえてみても、実感として感じる観点であると感じた。白老には豊富な山海の食材、町としては特殊ともいえるほどの第2次産業力、そして、決して町村としては少ない人口を抱え、新たな取り組みを目指す民間の方々も所在する。さらには、民族共生象徴空間開設という、全国的にも特筆すべきかつ個性的な制作環境に恵まれているまちでもある。

このようなまちづくり環境において、厳しい財政下にあるも「いまこそまちづくりへの挑戦が生きる瞬間」であると強く考える。竹田市は白老町を上回る勢いの高齢化率であり、かつ人口も2万2,000人余りと、白老からそう格差があるわけではないが、実に個性的な政策が挑戦実行されている。

私も、白老・オンリーワン・プロジェクトを、一人一人が可能な形で考え実行してい

けるまちを目指して、議員としての実践・町民支援に尽力する思いを新たにす。一人一人は微力であるが、決して無力ではない。

私の家の玄関には、首藤勝次氏の父である長湯温泉大丸旅館歴代当主首藤作次氏の言葉が掲げられている。まちづくりへの金言として紹介したい。

「歴史というみちは、言ったものでなく、行った者の後にこそ、残って消えない。」

2. 郷土愛で地元の活性化に挑戦する若者たち氏田善宣氏の講話と取り組み、小生所感

氏田氏は、竹田市観光大使を務める一方、もつ鍋居酒屋「陽はまた昇る」を経営、2014年に第9回居酒屋甲子園で全国優勝を遂げる、地元愛が溢れる方である。以前、札幌市で氏田氏の講演に参加したことがあった。氏は始め、もつ鍋のメッカ福岡市で修業を積み、満を持して店舗も決め、福岡での起業を目指していた。店舗開業のお祝いに、同級生が故郷竹田市に集まってくれたその帰りの夜、竹田の夜の街には、誰一人歩いていなかったそうである。

「俺は何をやっているんだ。」

その思いから、決めてあった福岡の店舗を解約し、もつ鍋を食べる文化もない大分県、高齢化率全国一にもなったことがある竹田市で、たった一人でもつ鍋の店「陽はまた昇る」を開業したと伺ったとき、不覚にも涙があふれたことを覚えている。

氏田氏は、地方創生実現を、飲食業を通じて行うことが使命と定めて「地元必愛店」を目指しているとのことであった。地域に密着し、関わってくれたすべての人（お客様、スタッフ）の幸せを理念に掲げ、ほとんどの食材は地元調達である。

地元を愛するだけでなく、働き方改革にも努め、スタッフはほとんどが同級生という思いを込めた取り組みも紹介された。こうした地元・人間を愛する取り組みが、居酒屋甲子園でも高く評価され、全国優勝を成し遂げるまでになったと感じた。

白老町にも、新しい、ともすれば無謀な取り組みにも映る挑戦を行う若手が現れてくる町であってほしいと心から願う。そしてそうした若者の活躍の裏には、それを理解し支援する年長者の存在もまた重要であると考えます。

3. 大分県豊後高田市「昭和のまちづくり」の取り組み

(1) 豊後高田市の概要

高田市は大分県北東部、国東半島の西側に位置する温暖な都市である。人口2万2,000人余り、海航路の拠点として一時は栄えたが、近年では過疎化が進行している。その一方で、後述するが既存商店街を活性化した取り組みが高く評価されているまちでもある。

(2) 高田市の「昭和のまち」

高田市の中心市街地は江戸時代から昭和30年代にかけては国東半島で最も栄えた町であった。しかし、それ以降は、時代の流れに取り残されたように衰退が顕著となってしまっていた。

そこで商店街が元気であった昭和30年代の活気をよみがえらせようと、平成13年に

「昭和のまち」を立ち上げ、当初7店舗から始めた運動は現在40店舗にも広がり、年間40万人もの観光客を集める商店街へと再生を遂げている。

(3) 豊後高田観光まちづくり株式会社

観光拠点施設である昭和ロマン蔵の運営や、昭和のまち案内を通じて交流人口を増加させる施策を展開、また周辺との連携により、商業と観光の一体的な振興を図る組織である。平成17年設立、従業員22名により運営されている。

(4) 昭和のまちの実態

以前は古びたまちであった町並みが、あるものを活かすという視点によって見事に生まれ変わったことは、大変興味深い。駄菓子屋や路地裏の秘密基地、写真館などの懐かしい町並みはもちろん、様々なイベント、まち歩きの名物語り案内人など、ソフト面での意欲的取り組みに、高田の方々の主体性や誇りを感じることができた。

また、昭和のまちの再現として、当時のようにまち歩きの観光客を呼び止める威勢の良い声など、売り子の方々の元気が味わいになっており、ハードによらない魅力造成も素晴らしい取り組みであった。さらに、関連してグルメ情報などの回遊性向上・経済効果増大を図る取り組みも見受けられている。

(5) 所感

さびれたまちも、見方を変えれば懐かしいまちへと変貌するという「発想の転換」がここまで具現化されたまちもそうなのではないかという意義深い取り組みであった。

白老町観光協会の理事であった際、道の駅構想を実現させたいという願いから町民の声を伺った際このような声があった。

「白老は、野菜栽培が盛んでないから、道の駅は成功しない。」

一面では真実である。実際、北海道伊達市の道の駅など、野菜の直売が活況を呈している。

しかし、白老の私たちが考えるべき視座は、「白老にあるものの価値を引き出す」ではないだろうか。確かに、白老は野菜栽培では他市に譲る。しかし、海の幸、白老牛、林産物といった、白老が他市に誇るものもあるのに、えてして住んでいる人間には、その価値が見出しにくい、当たり前なものに扱われている状況がある。

以前、富山県能登市の視察レポートで触れたが、冬に白老でも見られる、季節風で海から飛んでくる泡状のしぶきを、能登観光協会では「波の華」とよんで観光地の魅力としてPRするほどである。ただの泡でも、観光の魅力として活用する視点がある。高田市も、平成の時代に取り残されたまちを、昭和のまちと捉えなおして活用する。この「あるものを視座としたまちづくり」が白老の活性化の視座として重要であると考えられる。

高田の昭和のまちに、数百円で食事がとれる食堂があった。値段も昭和なんだと、案内人から伺ったが、正直採算には乗らないと感じた。この店の主人の心意気なのだという。まちづくりの原点は、この心意気にとどめを刺すのではないだろうか、強く思う次第である。